

## 源氏物語の女性と色に関する心理発達的考察

山田 真理子  
中島 美代子

### はじめに

日本語においては女性を「(俺の) いろ」と呼び、「色気」というと通常女性のそれを指し、男性の場合はわざわざ「男の色気」という。「艶っぽい」と表すとさらに女性の性的な魅力を強調したものとなる。一方、自然界では雌より雄の方が色鮮やかで、多色なものが多い。人間界においては、なぜ「女性」と「色」が結びついたのだろう？ 女が「色気」と視覚的であるのに対して「男臭さ」は嗅覚的である。雄のマーキングも「臭い付け」である。これらの事実の背景にあるものは何だろう？

本稿においては、「女性と色」の共通テーマに基づいて、源氏物語の研究者である表現学科の中島と、幼児の発達・心理臨床の立場から幼児教育学科の山田が考察を試みる。

### 1. 源氏物語における色

源氏物語自体が「予言された皇位継承のトラブルを避け、権力争いを恋争い（色事）にすり替えた物語」であり、「主人公が親である天皇（王）に災いなすと予言された物語」はエディプス王や観無量寿経の阿闍世の物語など、男性の手による物語が父子の血みどろの争いを描いているのに対して、この源氏物語の展開そのものが、作者が女性であることの特徴を示しているように思われる。さらに光源氏は（不義の）我が子が天皇になるに際してその援助を惜しまず、嫡男に対しては予想より低い位を与えることで、思いあがらないようにとの配慮を見せる。上昇志向の男性の価値觀

とは異なる視点をうかがわせる。

源氏物語を読むと、卷毎に登場する人物について、かならず衣服についての説明がある。現代のようにデザインの違いはないが、襲色目によって衣服による人物の個性を出しているのである。この当時は位によって着る色が違い好みによってもまた違った。人物の個性イコール色と考える現代のわれわれの理解とどう異なるのか、源氏物語を読みながら考えてみよう。

桐壷の巻の濃紫をはじめとして、全35巻に百色以上の色が登場する。  
(詳しくは、「源氏物語における色の役割」中島美代子 九州大谷研究紀要 第36号 2010・3)

これはそのほとんどが衣服の色であり、紙の色が少数含まれる。襲とは布を重ねて色の配合を考えたもので、染色の数は少なくとも重ねることで多くの色を表現できる。二色に布を染めて、部分的に二色を重ねれば、それぞれ一枚の部分と、重なった部分とで、色は三色として用いられる。その効果を狙ったのが襲(重)ね色目である。色はほとんどが植物で染色されたと考えられる。

また、階級によっても厳しく着衣に可能な色が決められており、古事類苑(服飾部) 色の項を見ると、天子の衣は黄櫨染とあり、その色は天皇の色と示してある。又、皇太子は黄丹、参議已上は赤を着て良し、殿上六位は青色の包を着る等、この編には官人の包の色の規定が書かれている。葡萄色は高級貴族が着た。

ただし「ゆるし色」とは、禁色(身分の高い人以外には禁じられている濃い紅や紫)ではなくて誰が着てもゆるされる色のことをいう。

## 2. 源氏物語の女性と色の意識

紫式部は源氏物語「末摘花の巻」において次のように述べている。

著給へる物どもをさへ言ひたつるも、物いひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそ先づ言ひためれ。

このように、人を表現するときに着ているもの、色が重要な役目を果たしている。

源氏物語の中では、光源氏が一番憧れた人が「藤壺の女御」で、常にそばにいて一番信頼していた女君が「紫の上」であり、紫には特別な意識を持っていたことがわかる。

### ① 藤壺女御（中宮）

「源氏物語はまさしく「紫」の物語である。物語に一貫している色といえば「紫」があげられる（中略）天皇が鎮座する高御座は紫の布で覆われている。」（「源氏物語の色辞典」吉岡幸雄 2008）

藤壺は桐壺帝の女御であり、光源氏にとっては義理の母に当たる。桐壺帝は光源氏の母「桐壺更衣」をこよなく愛した。そこに光源氏が生まれる。桐壺更衣はまもなく亡くなる。そこへ光源氏の母と面ざしの似た藤壺女御が入内してくる。母の面影を追う光源氏はやがて藤壺の女御を恋い慕い、とうとう不倫の関係にまでなってしまう。この不倫は「近親婚のタブーにふれるものではなく、光源氏の王権侵犯に関わる禁忌が問題なのだ」（藤井貞和）といわれる。そして、源氏にとっては戸籍上は弟にあたる後の冷泉帝が生まれる。源氏の子であるとは明確に描かれていない。がしかし、物語の構想上、大変重要な人である。

藤壺は「くちをしう飽かず」であり「もていでてらうらうじき事も見え給はざりしかど、いふかひあり、思ふさまにはかなき事わざをもしす。」「世にまたさばかりのたぐひありなむや」「深うよしづきたる所の、並びなくものし給ひし」（朝貌の巻）

と批評される人である。藤壺においては、衣服より、人物、人間性や趣味、教養が中心に表現され、読者にはその名前から紫、二藍の印象しかない。

又、桐壺帝生きあとは出家しているので、鈍色の衣服のイメージである。理想的な人物として描かれているので衣服や色は問題にされず、らうらうしき人、あらまほしき人として読者の目に入ってくる。

## ② 紫の上（若紫）

藤壺の姪である。光源氏十八才の時わらは病みを治すため北山の僧都の坊を訪問し、近くの寺にいるのを見出し、恋慕う。この時若紫は、山吹襲の衣服を着ている。桜の時期でもあり、紫の上は山吹とさくらのイメージから登場する。その後、光源氏の住む二条院に迎えられる。幼い若紫は源氏に次第になついてゆき、光源氏は若紫を自分の思う通りの女性に教育し、（この当時、女は素直、心やさしき人にならなければいけないと教育されていた）その後、新枕を交わす。結婚生活に入った紫の上は幸せな生活を送り、世間の人から羨ましがられる。

やがて光源氏は、右大臣、弘徽殿女御等の勢力に押されて、須磨で摘居生活を送らねばならなくなる。紫の上は須磨へ行く時の出発の準備から、留守居の万事を、光源氏から任され、うまく采配をとる。須磨へ行った光源氏とは手紙の行き来をして、紫の上は心を痛めながら京にいる。須磨へ行った光源氏に紫の上が整えた衣服は「ゆるし色の黄がちなるに、青鈍色の狩衣、指貫うちやつれて」という様子を、葵の上の兄頭中将が見てきている。紫の上は衣服の感覚において、時や立場をよく心得た人であると考えてよく、このことが女性の教養や人格を表すものとなっている。

それまで栄華を極めていた光源氏と紫の上だが、「若菜上の巻」になると、光源氏の六条院は揺れてくる。平林優子氏はその著の中で

光源氏の栄華は、準太上天皇という高い社会的地位によって、すべてが保証されるのではなく、光源氏自身の美しい容姿や豊かな才能、六条院の女たちの統制のとれた協力など、公私にわたる様々な要因が、複雑に絡み合いながら支えてきたといえる。突然降って沸いたような女三宮の降嫁は女たちの危うい均衡の上に成り立つ六条院世界の調和を一瞬に

して破壊し光源氏は次々と生まれ出る綻びを必死に繕う以外、なす術がない（源氏物語女性論）  
とあるが、この均衡を保ったのも、紫の上の力があるが故にできたのである。

「玉鬘の巻」で光源氏は紫の上に「紅梅のいと紋浮きたる葡萄染めの御小うちぎ、今様色のいとすぐれたる」晴れ着を、新年を迎える紫の上に贈る。

紫のゆかりといわれるよう、紫の上は気品と色を調和させた人と考えてよい。

### ③ 朝顔の君（斎院となり、退下して前斎院として登場）

「心ばへよき人」の一人である。

光源氏のいとこであり、若いころから光源氏に求婚されても応じない女性である。帝の即位に伴って賀茂の斎院となり、父桃園式部卿の死により斎院を解かれ、また光源氏の求愛を受けるが決して靡かず、出家を考えているからと、拒み通す。この朝顔の君と、六条御息所の娘（斎宮の女御）と夕顔の娘（玉鬘）は光源氏が、思いを遂げられなかった女性である。作者は朝顔の君を斎院として、また、父の喪中として地味な色彩を与えている。この女君の色は着るものではなかなか評価できないが鈍色の上品な色を作者は思い描いているのである。鈍色は山崎青樹氏の著には「くぬぎの樹皮を用い、木酢酸鉄の媒染でそめた（草木染日本色辞典）」とある。

### ④ 龍月夜尚侍

「らうらうじ」「ゆゑゆゑし」「なまめかし」「かたちよき女」というのが、この人の評価である。（朝顔の巻）

右大臣の娘で、弘徽殿女御の妹君である。「花の宴」の巻で光源氏と初めて出会うのである。南殿（紫宸殿）の桜の宴が終ったあと、藤壺のあたりをうかがい歩いた光源氏が、弘徽殿の細殿が開いていたので忍び込みと龍月夜と契りをかわし、扇を交換する。扇は、桜襲であった。

光源氏との密会が原因で参内停止になったが、父右大臣や姉弘徽殿女御の口添で許される。朧月夜は朱雀帝の寵愛を受けながらも光源氏のことを思い続けている。後、朧月夜は光源氏のことを後悔する。光源氏は朧月夜の美しい顔立ちや、利発さ、優れた人柄を褒める。その後、十四年ぶりに一夜を共にし、感慨にふけるが、その後出家する。

朧月夜には作者は、伊勢物語の五条の妃（仁明帝妃）をモデルにしているといわれているが、華やかで、色っぽく、「なまめかしき=みずみずしい」人という印象を表現している。光源氏と最初に出会った時の桜襲の扇がよく似合う女性としている。

### ⑤ 明石の君

「かずにもあらずおとしめ給ふ」「身のほどにはややうち過ぎ、物の心などえつべけれ」、「人よりことなる」「思ひあがれる」（朝顔の巻）と評している。光源氏が明石にいる時に知り合った女性である。父明石の入道は光源氏と自分の娘との結婚を望み、光源氏を迎える。光源氏がこの女君に最初に送った手紙は高麗の胡桃色の紙であった。貴族たちは高麗や唐から来た高価な紙などを使っていた。しかし、明石の君は自分が元受領の娘という田舎者にすぎないため、光源氏との結婚は分不相応と悲しく思う。光源氏への手紙には、「香淺からずしめた紫の紙」に返事を書くなどするが身分の格差にためらい続ける。「ざまはあてにそびえ」とあるので長身と考えて良い。明石という土地柄を考えると、気候は温暖で、農産物や魚類などの新鮮な食糧に恵まれていたであろうし、京の上流階級の婦女子に比べて健康的な生活をしていたであろう。このことは、「蛍の巻」で光源氏が玉鬘の姿を見た時、「聳やか」といい、体格がいいことをのべている。

母、夕顔の死後、玉鬘は、乳母一家と共に、九州大宰府へ渡り、唐津の港から京へ帰ったという、育ちを考えると、同じようなことが言える。  
藻塩焼く煙漂う中で入道は娘に教養と琴の技術を教えた。

光源氏が京へ帰る頃、明石の君は光源氏の子供を身ごもっており、深い悲しみに沈む。別れの日、光源氏から形見に琴を贈られ。再会を誓う。旅装としての狩の御装束のセンスのよさは、父入道であろうか。光源氏は後に明石の君は姫を出産する。が、離れて住んでいては差し支えもあるので、先ず京の郊外の大堰の地に明石の君が移り住む。そしてこの姫は後に紫の上に育てられるが（後の明石の中宮）明石の君が健康だからこそ子供を無事に出産することができたのである。子供のない紫の上は大変可愛がる。明石の姫の例で示している。

（若菜下の巻）では明石の君は光源氏の六条院に移り住むが、西北の町（冬の御殿）に定められる。姫は入内し、明石の女御となる。女御は皇子を出産し産湯の介添えなどするが、まわりの女房たちに、気品があり素晴らしい女性と言われる。この明石の君に作者は高貴な出自ではないが品のある色を与えていた。「玉鬘の巻」において光源氏が新年の着物を君に贈る時、明石の君には「梅の折枝蝶とびちがひ、唐めいたる白き小うちぎに、濃きがつややかなる重ねて」贈っている。所を考えても、「気品」とか「つややか」と作者は明石の君についての印象を表現している。

#### ⑥ 花散里

光源氏はかつて麗景殿女御の妹と逢瀬をもったことを思い出し、五月雨の晴れ間に訪れて歌を贈答する。（花散里の巻）そして、花散里のことを「心ばへよき人」「深うあはれなる人」「かたみにそむくべくもあらず」（朝顔の巻）と表現している。須磨へ出発前にも訪れて別れを惜しむ。（須磨の巻）光源氏が須磨から帰って、「澪標の巻」で久しぶりにあうが、二条東院完成によってその西の対に迎え入れられる。母のいない夕霧の後見を光源氏に頼まれ快く引き受け暖かく育む。「若菜下の巻」では夕霧の子供たちを育てる。その後六条院の東北の町（夏の御殿）に移り住む。花散里は裁縫が大変上手で光源氏の四十の賀の時の衣装を整えたり、「若菜下の巻」では朧月夜の尼衣を仕立てたりする。当時の女性は、裁縫の技術や衣

服のセンスを重くみられた向きがあつて、花散里は光源氏にとって大変重要な人であった。「幻の巻」では四月の衣替えの頃、花散里は、従来、紫の上が調整していた衣替えの装束を代わって整えたりする。

「少女の巻」では、夕霧によって「容貌はまほならずもおはしけるかな」とか「すぐれざりける御容貌」などと評されている。「蓬生の巻」では、花散里の不器量は末摘花と差はないとまで書かれている。「澪標の巻」で「年頃にいよいよ荒れまさり、すごげ」な所に住んでいると表現された花散里である。が、夕霧の後見をするというところや夕霧の子供の面倒を見る、裁縫が得意な面など、装束に関するセンスを評価され、光源氏の栄華の中でなくてはならない人となる。

いと濃き搔練具して夏の御方に（玉鬘の巻）とあるように花散里には印象の強い色を与えていた。花散里はあとになるに従って人格や個性が表れてくる人である。地味な存在であるが、落ち着いた人として表現されている。これは作者の人に対する考え方である。

#### ⑦ 末摘花

雨夜の品定めの中で、上の品（上流階級）の女君より中の品（中流階級）の女君の方が面白いという話を聞いた光源氏は、没落した上流階級だが、夕顔の君のような「らうたげならむ人」と思って末摘花を訪ねる。末摘花は常陸の宮の遺児である。類まれな醜い顔とされている。が、「色は雪はづかしう白うて」とされる顔色と、髪の毛は、「うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、うちぎの裾にたまりて、ひかれたるほど、一尺ばかり余りたると見ゆ」という女に、「ゆるし色の上白みたる一襲、名残なう黒きうちぎ重ねて上着に黒豹の皮衣いと清らにかうばしきを着たり。」それは「古代のゆゑづきたる御装束」なのであり、父の遺品なのである。その後、末摘花は光源氏によって少し貧しさから救われて、年の暮れになると、光源氏のところへ、正月に着る衣装として「古代なる」衣箱を送ってくる。添えてある歌も古めかしかった。（末

摘花の巻) この「古代なる」は巻の名から考えて赤と考えられる。通例として正妻でもない末摘花が光源氏に正月に着るものを贈るのは筋違いであり、「古代なる」色はこの場合適切ではない。それが末摘花にはわからない。贈り物をする時にまわりの女房達は誰もそのおかしさを指摘しない。(玉鬘の巻) その時、光源氏は末摘花を“ほほえむ”(苦笑する)とみている。

光源氏からうとまれたのは鼻の不格好さ、または顔の醜さとされているが、そなばかりではない。彼女の無言の態度、服装や教養全てにおいて古めかしく、劣るものと表現されている。洗練されたセンスがない故に末摘花は光源氏から疎とまれたと私はつねに考えている。早くに両親を亡くし、教育をしてくれる人が傍にいなかったという不運と、自分で自分を磨こうとする意欲がなかったからである。ここで作者紫式部は、教育の必要性、センスを磨くことの必要性を述べている。登場人物の色に対する洗練されたものや、教養の深さがその人の運命を変えると我々現代人に伝えているのである。

ここに述べた、色と人物の関係は色の配慮、色の雰囲気、本人が選んだり着たりしている着もの紙等の色の感覚はそれぞれの人間性を表わしている。色と人間性、生き方は密接なつながりがあると源氏物語では述べている。

女性は着ているもので、また、使う調度で自分の意識や、品格を表わし、出だし衣等において他人の気を引くことを考えた。髪の毛の長さ、着ている色は、女性には存在の条件だったと考えられる。

男性は、行動する時、自分をアピールする香りを必ず衣に炊きしめている。故に、「ひかり」も「かおる」も「におう」も美しいと訳はできるが、源氏物語の中心になる男性の名前は、前半が「光源氏」であり、後半が「薰の大将」と「匂宮」である所を見れば、男性の美しさは色ではなく、嗅覚的なもので表現したのであろう。

### 3. 考 察

#### (1) 染色と十二単

衣服を纏う人間において、布に色をつける染色は、なくてはならない作業である。

また、「衣服を纏う」ことが、動物界と異なって人間において女性と色をつなぐことになった背景にあると思われる。すなわち、衣服によって、生まれつきの色に左右されることなく「色で身を包む」ことができるようになったのである。そして衣服が脱ぎ着できるから、動物界では（子ども・卵を産む雌の宿命から）地味であることが必要であった雌が、人間においては華やかな色を纏うことが可能になったといえる。

さらに、日本の着物文化は、デザインによる変化がほとんどない。西洋のドレスと違って、和服は外型は同じなのである。畢竟、違いを際立たせるのは「色」の役目となる。

源氏物語をひも解くと、染色を指示し、染めた布を贈り物として、色のセンスを競う女性たちが登場する。織姫は女性であるが、外の社会で着るのは男性である。

女性たちは色を濃くするためにもう一度染料に入れることで、気持ちを込める。一入を「ひとしお」と読むのはこのためであり、気持ちを込めて染色は深い関係がある。

また、当時の染色は草木染が主であるため、混色が難しい。そのために考え出されたのが襲（かさね）である。女性たちは薄い布の色を重ねることで、混色を生み出し、十二単において色合わせのセンスを磨いた。

女性はたとえ外出しても自分の姿を人目にさらすことはなく、牛車から衣服の裾を少し出すこと（出し衣）が自己表現であった。そして、人々はその布の色目でその女性のセンスを測り、男性は気に入った色の女性に文を送る。返書をもらえば夜暗くなつてから、明かりも乏しい寝所に忍び込む男性にとっては、その出し衣の色は、鮮やかにも忘れ難く眼に残ったことであろう。

## (2) 幼児期に使用される色の男女差

一体男女の色に関する感性は生来的に異なるのだろうか？違いがあるとしたら、いつ頃からなのだろうか？ということをひも解くために、まず幼児の絵画とともに、使用する色の男女差の年齢変化を調べた。

## (研究方法)

幼児の絵（2歳～6歳）7415作品（3歳以下41名、4歳35名、5歳以上49名）

調査時期 2009年度の2009年12月20日までのT幼稚園の全園児の作品

調査方法 園児の絵に使用されている色を数える。

（この園は描画にサインペンを使用しているため混色の使用がない）

## (研究結果)

(1) 幼児期の色の使用について、各年齢別に使用頻度を示したものが図1～3である。

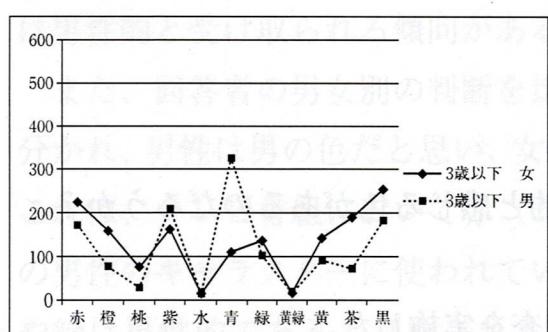


図1 3歳児に使用される色の男女比較

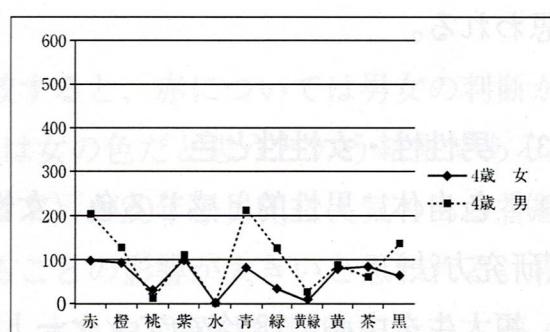


図2 4歳児に使用される色の男女比較

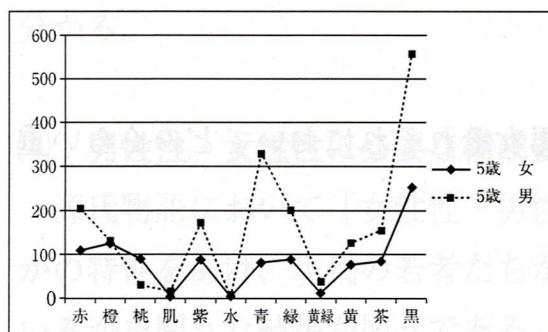


図3 5歳児に使用される色の男女比較

### (結果の考察)

- ① 4歳以上は男児の方が使用する色が多い。
- ② 3歳以下でも男女差はみられるが、4歳以上の差と異なる傾向がある。
- ③ 使用する色の男女差は、年齢によって変動があった。
- ④ 青は一貫して男児が多く使う。
- ⑤ 橙・赤・黄色・茶色は3歳以下は女児の使用が多いが、4歳以降は男児が多くなる。
- ⑥ ピンクは一貫して女児が多く使う。

以上のことから、幼児においては4歳以降から色の使用における男女差が明確になってくるが、ここで見られた就学前においては男児の方が多色使用の傾向が見られた。幼児向けの文化の影響は受けて、女児においてピンクが多用される傾向はあるものの、他の色については男児の使用頻度が全般的に高いのである。これは、本来雄の方が多色であることに繋がると思われる。

### (3) 男性性・女性性と色

- (1) 色自体に男性的と感じる色、女性的と感じる色があるのだろうか？

#### (研究方法)

短大生を中心に235名のアンケート調査を実施した。

問1、クレパスにおいて使用頻度の高い12色について、男女どちらのイメージか。

問2、好きな色。

問3、やさしさや外見などの要素が、男女それぞれにおいてどのくらい重要な要であるか。

(結果)

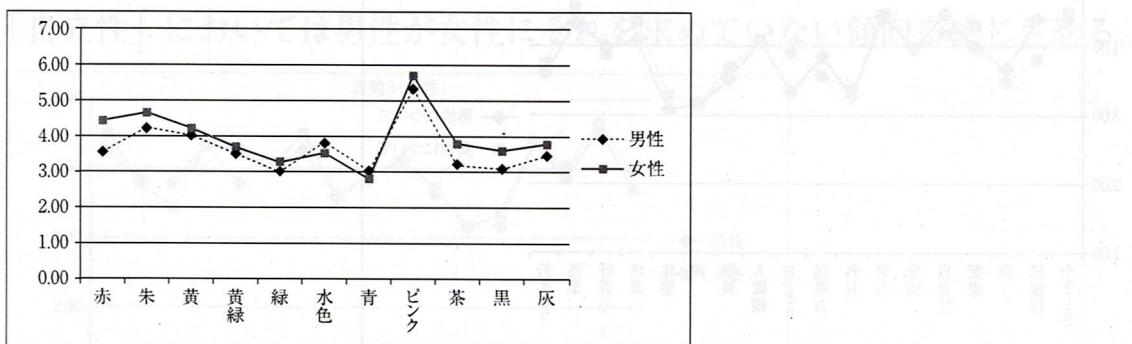


図4 色に感じる男性性・女性性  
(結果の考察)

評価は4を中心点として、5以上は女性的、3以下は男性的と判断される色である。平均すると3～5の間にほとんどの色があり、青が男性的な色、ピンクが女性的な色と感じられるのを除いて、男女どちらとも受け取れる色であることが分かる。その中でも暖色系は女性的、寒色系や無彩色は男性的と受け取られる傾向がある。

また、回答者の男女別の判断を比較すると、赤については男女の判断が分かれ、男性は男の色だと思い、女性は女の色だと思うという結果である。これは、テレビ番組において赤（レッド）が20年来男児に人気のある番組の男性のキャラクターに使われていることの影響が大きいと思われる。青や緑は男性的であると判断されるが、水色や黄緑は中性的になる。茶・黒・灰色に対しては、女性は男性ほど「男の色」とは思っていないことが分かる。

#### (4) 男性性・女性性に必要な構成要素

源氏物語において「女性性・男性性の重要な要素」とされているいくつかの特性をあげ、現代の若者たちがそれらの要素をどれほど重要と考えているかを問うた結果が図5である。

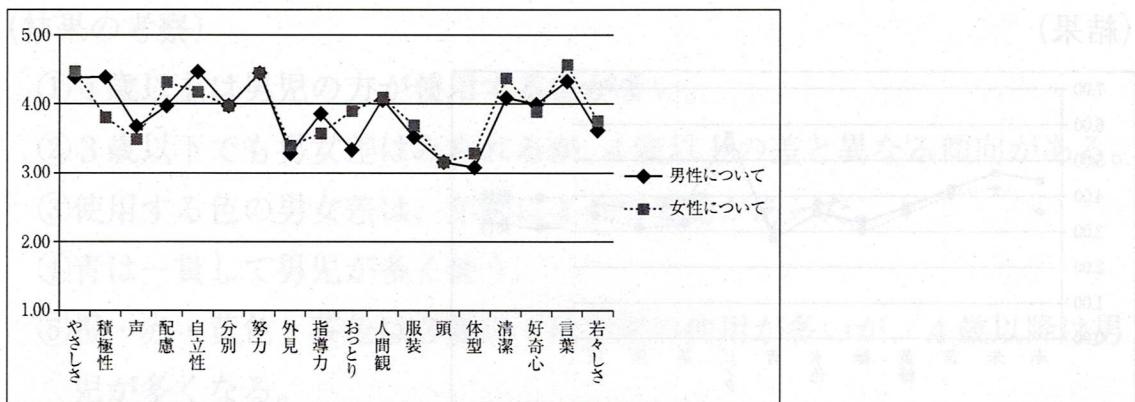


図5 男性性・女性性にとっての重要度  
(結果の考察)

男性・女性ともやさしさ、清潔さ、言葉使い、努力などは共通して重要度が高く、それに比べて体型、外見、頭の良さなどは重要度が低い。

女性においては配慮、おっとりが男性より重要と思われ、男性においては積極性、自立性、指導力などが女性より重要とされている。女性における自立性は(図6参照)、男性が感じる重要さは、女性が重要と感じる割合より低い値になっている。

さらに回答者のうち10代と30代以上の回答を比較すると、おおむね30代より10代の方が中間値に近く、重要と思う要素があいまいともいえる。また、10代より30代の方が頭の良さや分別を求める傾向にあることが分かった。社会との接触度によるものかと思われる。

#### (5) 誰から見た女らしさ?

「では女らしさとは何か?」を先ほどの調査結果を別の角度から分析しよう。すると、男性が考える女性性と女性が考える女性性には、若干のずれがあるようである。

図6をみると、女性にとって重要な要素として挙げられている中で、男性の方が高く評価しているものは「声」であり、源氏物語の時代と同様であったことは驚きであった。

一方、男性より女性の方が重視している要素(男性は女性ほど重要だ

と考えていない)としては、「やさしさ」「自立性」「努力」であり、特に「自立性」においては男性が女性にそれを求めていない傾向を感じさせる。

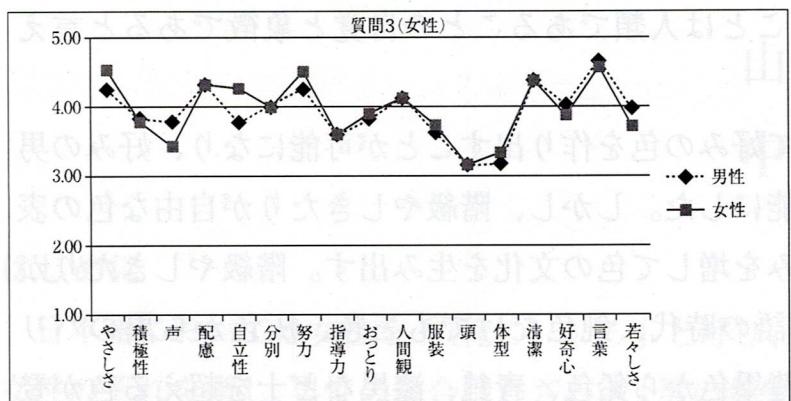


図6 女性にとっての重要度（回答者男女別）

#### 4. まとめ

源氏物語において、女性は色と一体化したものとして描かれている。その女性の位を表す色であることもあるし、立場や環境を表す色であることもあるが、いずれにしてもその女性（ひと）が着ている色を見れば、多くの周辺情報が伝わることになる。

それだけに、源氏物語の女性たちは、自分の身に纏う色に細やかな配慮とルールを作りだした。その無言のルールは、「そのルールをわきまえたものは認められ、そのルールを知らないものを無言のうちに排除し、さげすむ」力さえも持っている。

幼児期において、色を多用するのはむしろ男児であることが結果からうかがわれた。

しかし、男性はやがて女性から与えられる衣服に身を包むようになる。これは文化が生み出した役割分担であろう。そしてそこに、人類だけが持つ「衣服を纏う」という行為が深く関与する。衣服を身につけることのない動物たちは、生まれ持った色を自分の色として一生を生きるしかない。卵を抱くために目立たない色の雌と、雌を得るために華やかな色の雄という組み合わせは、命の繋がりを維持するという種の保存の絶対的なルール

から逃れ得ないのである。しかし、衣服を纏うことを手に入れた人類は、初めて女性が華やかな色を身に付けることを可能にした。すなわち、女性が多くの色を身に纏うことは人類であることの自覚と象徴であると言える。

そして、染色をもって好みの色を作り出すことが可能になり、好みの男性に色を贈ることを可能にした。しかし、階級やしきたりが自由な色の表現を阻む時、染色は深みを増して色の文化を生み出す。階級やしきたりが最優先であった源氏物語の時代、鈍色だけでも三色、灰色から黒のバリエーションとなると、薄墨色から鉛色、青鉛、漆黒など十を超える色が登場する。われわれは、そこに日本の美を見る。

抱卵の時に目立ってはいけないという鉄則から着衣によって自由になつたことが女性に色を与え、男社会の規範（制限）が女性の色の表現を深めた。それを文学的に見事に表現したものが源氏物語であるといえよう。今一度、源氏物語の女性たちを表す色の中に、その両面を感じながら読んでみていただけだとありがたい。

開学40周年記念を機に、ユニークな学科を持つ本学の特徴の一つとして、表現学科教員と幼稚教育学科教員のコラボレーションがどのような世界を生みだすことができるかに挑戦してみた（本文の第2章を主に中島が担当し、他の章を主に山田が執筆した。）。本稿をきっかけにして子どもの絵に、男女の違いに、源氏物語に、これまでと違った関心を持っていただけたら幸いである。

## 参考文献

源氏物語の色辞典 吉岡幸雄（紫紅社）